

研究ノート

ベネズエラ・チャベス政権を読み解くための鍵
—ボリーバル革命の一考察—

大久保 仁奈

はじめに	2
1. チャベス大統領の誕生まで	4
(1) 生い立ち	4
(2) 軍人としての経験	5
2. ボリーバル革命の思想的側面	10
(1) ボリーバル革命の提唱	10
(2) 3つの根から成る樹木	11
(3) チャベス大統領の特徴	14
3. 左派政党とボリーバル革命	17
(1) 伝統左派政党の歴史	18
(2) 第五共和国運動党（MVR）の位置付け	19
4. ボリーバル革命の実践	21
(1) 概要	21
(2) 国内戦略	22
(3) 対外戦略	25
おわりに	29
参考文献	33

はじめに

1. 1805年8月15日。第二回目の欧州訪問をしていたシモン・ボリーバル (Simón Bolívar) が、恩師のシモン・ロドリゲス (Simón Rodríguez) とパリで再会した後、共にイタリアに向かい、ローマのモンテ・サクロの丘で、スペインからのイSPANアメリカの解放に身を捧げることを誓った日である¹⁾。あれから2世紀が経過した2005年8月15日、ベネズエラのチャベス大統領は、国会主催の「モンテ・サクロの誓い」200周年記念行事において、当時のシモン・ボリーバルの誓いの言葉を借り、「スペイン」の部分を「米国」に変え、「我々にのし掛かる米国の帝国主義の脅威から国民を解放するまで、我々の腕に休息を与えず、魂に安らぎを与えないことを誓い、約束しなければならない」との演説を行った。

ちょうど一年前の8月15日には、大統領罷免国民投票が実施されたが、有権者の70%が投票に赴いたこの日を契機として、ベネズエラの政治的シナリオは大きく変わった。当時、現在のような政情になると誰が予想し得ただろうか。そうした予想ももちろんあったが、どちらが勝利してもおかしくないという予想が大方であった。しかし、蓋を開けてみれば、罷免反対580万票、罷免賛成が399万票と180万票近い差をつけた結果となり、選挙システムに不正があったと主張する反政府派の批判をもとめせず、2007年1月までのチャベス大統領の任期が確認された。その後、政治情勢はチャベス大統領にとって順風となり、支持率も回復してきた。国内の情勢が落ち着いた後は、外交活動を精力的に推進し、今ではラテンアメリカの地域統合に向け力を注ぎ、上記のような自信に満ちた発言を行うようになっている。更に、チャベス大統領は、この「モンテ・サクロの誓い」200周年記念行事の場を借りて、2030年まで大統領職を継続する意思を表明した²⁾。

1) 文献K、24頁、27-28頁。

2) 現行憲法では一回に限り再選が認められているので、憲法改正が必要。チャベス大統領は、シモン・ボリーバルがカラボボでスペイン軍を破りベネズエラを解放した200周年となる2021年までの任期継続を発表していたが、更に9年間延びることになった。シモン・ボリーバルは1830年12月17日に逝去している。

2. チャベス政権が発足して6年半以上が経過したが、現在のように比較的国内が安定した状況となったのは、この大統領罷免国民投票以降である。それまでは深刻な政治危機が一時期続いていた。2002年4月には政変が起こり、チャベス大統領は一度失脚し、オルチラ島に幽閉されるという事態に発展した。そのような極限の中から48時間後に復権を果たし、それ以来、同政権は、2002年10月の軍人による不服従宣言、2002年12月から約2ヶ月間続いたゼネスト、そして、政治危機の民主的な解決としての2004年8月の大統領罷免国民投票と、数度に亘り政治生命の危機に瀕し、その度克服してきた。その背景には常に「ボリーバル革命」というチャベス大統領が掲げる信条が存在したことを忘れてはならない。多くの機会に繰り返し言及されているため、ベネズエラ国民の中でも定着していると思われるボリーバル革命という言葉は、耳に馴染んでいる割には、実態はあまり明らかになっていない。

3. 本稿の目的は、チャベス大統領が提唱するボリーバル革命とは一体何かという点につき、その思想的背景、実践面、国際的な影響を考察することである。そのために、第一節でチャベス大統領の生い立ちと、大統領になるまでの軌跡を時系列的に概観し、第二節においてボリーバル革命の思想的側面を考察する。その後、第三節でベネズエラの伝統左派政党の歴史と与党・第五共和国運動党 (Movimiento Quinta República : MVR) の特徴を追い、第四章では、チャベス政権におけるボリーバル革命を実践面から検証する。

なお、本稿の内容は在ベネズエラ日本国大使館の公式見解ではなく私見であることを付記しておく。

1. チャベス大統領の誕生まで

(1) 生い立ち

(イ) ジャネーロ

ウゴ・ラファエル・チャベス・フリヤス (Hugo Rafael Chávez Frías。敬称略。以下同様) は、1954年7月28日、父・ウゴ・デ・ロス・レイェス・チャベス (Hugo de Los Reyes Chávez。現バリナーナス州知事)、母エレナ・フリヤス・デ・チャベス (Elena Frías de Chávez) の間の6人兄弟の次男として、バリナーナス州サバナタ (オリノコ川流域地帯の農村地帯にある州南西部のジャノと呼ばれる小都市) に生まれた。両親とも教師であり教育熱心であったが、経済的な事情もあって、ウゴ少年は兄アダン (Adán。現駐キューバ大使) と共に子供の頃、父方の祖母であるロサ・イネス・チャベス (Rosa Inés Chávez) に預けられたため、この祖母の影響を大きく受けて育った (末娘に同じ名前を付けている)。小学校はサバナタ、中学校は州都で過ごし、当時バリナーナス州唯一の高校であったオレアリ高校を卒業した。また、子供の頃の夢はプロの野球選手になることであり、彼のアイドルは当時活躍していたイサイアス・ラティゴ・チャベス (Isaías “Látigo” Chávez) 選手であった。また、絵を描くことも好きだったようである。数少ないチャベス氏の伝記の一つである「HUGO CHÁVEZ SIN UNIFORME」³⁾ では、チャベス大統領の現在の激し易い性格が、母親との別居と祖母の影響によるのではないかとの見方を、幾つかの証言を織り込みながら提示している。

(ロ) 勇士マイサンタの曾孫

チャベスの演説の中には、母方の曾祖父であり、20世紀初頭のフアン・ビセンテ・ゴメス (Juan Vicente Gómez) 政権時代、シプリアーノ・カストロ (Cipriano Castro) 派の将軍として反旗を翻して闘ったペドロ・ペレス・デルガド (Pedro Pérez Delgado。通称:マイサンタ (Maisanta)。1870年代生まれ) がよく登場する。

3) 文献C、37-39頁。

子供の頃、育ての母親であった父方の祖母に叱られる時、「おまえは殺し屋と血が繋がっているのだから」と言われてきたが、成人して、バリーナス出身の医師であるホセ・レオン・タピア (José León Tapia) が執筆したマイサンタに関する本に出会い、そこで初めてマイサンタが曾祖父であることを知ったという⁴⁾。チャベスはその後、軍の図書館で資料を探し、曾祖父の足跡を辿ることで自分のルーツを確認し、それ以来、曾孫としてマイサンタを誇りに思い、多くの機会に紹介している。

(2) 軍人としての経験

(イ) 士官候補生

チャベスは17歳 (1971年8月。第一次ラファエル・カルデラ (Rafael Caldera) 政権下) で陸軍士官学校に入学した。陸軍士官学校時代の1974年12月には、アヤクーチョ戦勝150周年記念行事に参加するためにペルーを訪問し、当時のペルー大統領フアン・ベラスコ (Juan Velazco) 将軍やパナマの軍人オマール・トリホス (Omar Torrijos) をはじめとするパナマやチリの軍人と会合する機会を持つ。当時の士官候補生が陸軍士官学校の中で反乱や革命について語る機会はなかったものの、ベネズエラやラテンアメリカで起きていた事態に対する政治的な懸念が生じていた中で、このペルー訪問は非常に重要な経験であったと思われる⁵⁾。チャベス本人によれば、1992年2月4日のクーデター未遂事件まで、ベラスコ将軍から贈られた「ペルー革命」という本を常に鞆の中に入れて持ち歩いていた。第一次カルロス・アンドレス・ペレス (Carlos Andrés Pérez) 政権下の1975年に卒業した後は、バリーナス州を拠点とする反ゲリラ闘争を目的とした陸軍歩兵大隊の一つである追撃

4) 文献A、29頁、59-60頁 (同文献は、1995年3月28日から1998年6月28日迄に14回に亘り実施されたチャベス氏に対するインタビューを纏めたもの。大統領になる前のチャベス氏の証言は今日でも一貫している点が多く、同氏の思想的背景を知る上でも貴重な資料となっている)。なお、ここで言及している本はJosé León Tapia, *Maisanta, el último hombre a caballo*, Alfadil Ediciones, Caracas, 2004.。

5) 文献A、39頁。

大隊「Manuel Cedeño」で活動を開始した⁶⁾。

(口) 青年将校

「Manuel Cedeño」大隊での1年間の活動を経て、チャベスはスクレ州クマナの部隊に送られるが、そこで伝統的な軍事教義や規律と衝突することになる。1977年にアンソアテギ州サン・マテオに設立された作戦部隊の小隊長に任命され、通信関係の将校として派遣される⁷⁾。軍事反乱罪で告発すると脅迫された最初のケースとして、当時、国軍情報部の退役大佐が数人の兵士と共に、3名のゲリラ兵と思しき男を野営に連れてきて泊めた時のエピソードがある。チャベス小隊長はこの時、兵士達がこれらの捕虜をバットで叩いているのに気づき、同退役大佐に出て行くよう、また、ゲリラ兵を引き渡すよう求めたが、こうした決定を下したことで、後日、軍人反乱罪で告発する旨の通告を受け、結果として所属部隊を去ることになった。当時の日記に、政治的な野望と共に、民族主義的な思いと米国に対する嫌悪感を綴っているが、その頃から、何か行動を起こすべきであると感じ、陸軍内では表向きは忠誠と規律を遵守しながらも、地下活動を開始することになる⁸⁾。同じ頃、23歳のチャベスは、最初の妻となるナンシー・コルメナレス (Nancy Colmenares) と結婚するが、家族に対しては中立、無党派で通しており、状況によって2つの立場を使い分けていたようである⁹⁾。

チャベスは1977年、5人の兵士と共にベネズエラ大衆解放軍 (Ejército de Liberación del Pueblo de Venezuela) を結成するが(「ecolimapapavictor」と読ませた由)、グループを結成しただけで、明確な方針の下に活動を行っていた訳ではなかった。その後、チャベスはモナガス州マトゥリンの大隊に、そして、アラグア州

6) 文献A、47-48頁。

7) 文献A、51頁、54-56頁。

8) 文献C、76-77頁。

9) 文献C、77頁。ナンシー・コルメナレスとはその後離婚し、1997年にマリサベル・ロドリゲス (Marisabel Rodríguez) と再婚するが、再び離婚。子供は、前妻との間に2女1男、後妻との間に1女。

マラカイの落下傘部隊に派遣され、1978年には陸軍中尉に昇格した¹⁰⁾。

(ハ)「サマン・デ・グエレの誓い」

現在の第五共和国運動党 (Movimiento Quinta República : MVR) の原点とも言うべきボリーバル革命軍200 (Ejército Bolivariano Revolucionario-200 : EBR-200。エセキエル・サモラ (Ezequiel Zamora)、シモン・ボリーバル及びシモン・ロドリゲスの名字・名前の頭文字 (EBR) という意味も有る。200はシモン・ボリーバル生誕200周年を象徴する数字) が結成されたのは1982年12月17日である¹¹⁾。シモン・ボリーバル逝去の日当たる同日、軍で記念行事が行われ、チャベスは約1,000人の軍人を前に演説を行った。キューバの詩人であり革命家ホセ・マルティ (José Martí) の言葉を引用し、また、シモン・ボリーバルの生き様について演説を行い、「ボリーバルがもし生きていたら、この国を導いているやり方をどう見るだろうか。恐らく、我々が自分の夢を達成していないことに異議を唱えるのではないだろうか」と聴衆に訴えた。

その後、同期であるヘスス・ウルダネタ (Jesús Urdaneta。陸軍中佐 (退)。元内務警察 (DISIP) 長官) とフェリペ・アコスタ・カルレス (Felipe Acosta Carles。現カラボボ州知事 (退役国家警備軍 (GN) 中將) の実兄)、一年後輩に当たるラウル・バドゥエル (Raúl Baduel。現陸軍総司令官) と共にサマン・デ・グエレ (Samán de Güere。アラグア州) に向かい、サマン (アメリカネム) の木の下で、「父なる神のために、祖国のために、自分の名誉のために、権力者の意志により我々国民をつながれている鎖を断つまでは、自分の魂に安らぎを与えず、腕にも休息させない」と誓っ

10) 文献A、57-58頁。

11) 文献C、90頁。シモン・ボリーバルの誕生日は1783年7月であるので、200周年は1983年になるが、チャベス大統領、バドゥエル陸軍総司令官が1982年であったと主張する一方で、ウルダネタ陸軍大佐(退)は、最初は1983年、その後は、「恐らく1982年である」と曖昧な主張をしている由。他方、チャベス氏は1992年11月1日付書簡において、EBR-200は1983年12月17日に誕生したと記していることから、EBR-200の結成年に関する真偽は不明。ここではチャベス氏の最近の主張である1982年12月17日を適用する。

た。これは、1805年8月15日にシモン・ボリーバルが行った「モンテ・サクロの誓い」に倣ったもので、「スペインの権力」の部分で「権力者」に置き換えたものであった¹²⁾。これが、「サマン・デ・グエレの誓い」であり、以後、この地下運動に参加を希望する者はこの誓いを行うことが義務付けられた。

(二)「ボリーバル革命運動-200」の結成

その後、チャベスは、急進大義党 (La Causa R : LCR) のパブロ・メディーナ (Pablo Medina) や民族解放戦線 (Frente de Liberación Nacional : FLN。ベネズエラ共産党 (Partido Comunista de Venezuela : PCV) から分岐した武装勢力) のドゥグラス・ブラボ (Douglas Bravo)、現役軍人革命同盟 (Alianza Revolucionaria de Militares Activas : ARMA。共産主義系の空軍の地下組織) のウィリアム・イサーラ (William Izarra) 他とも接触しながら、地下活動を続けていく¹³⁾。そして、ボリーバル革命軍200 (EBR-200) には、陸軍以外の軍人及び民間人も参加するようになったことから、ボリーバル革命運動200 (Movimiento Bolivariano Revolucionario-200 : MBR-200) に名称を変え、1986年には同組織の第一回会合が開催される¹⁴⁾。

チャベス大統領は、2005年2月4日に開催されたクーデター未遂事件13周年記念集会において、「MBR-200はメンバーの増加と共に規模を拡大したが、全てを管理することが難しくなったため、1987年には活動規模を縮小せざるを得ない状況となった」と述べ、「抑圧的で専制的な政権の下で、国民の貧困化が進み、汚職や不正が蔓延り、国民に対する政治的な侵害や迫害が行われているのを目の当たりに

12) 文献C、89-90頁。

13) 文献B。同文献には、上記3名を含む13名の証言がインタビュー形式で掲載されている。メディーナは、現在は反政府勢力の指導者、ブラボはその後「第三の道」(Tercer Camino) を結成、イサーラはMVR創設メンバーの一人でもあり現外務次官。

14) 2005年2月4日のクーデター未遂事件13周年記念集会における演説での言及であるが、このMBR-200結成時期についても諸説あり。チャベス大統領は文献Aの中で1989年以降である旨発言。

している中で、ついに1989年2月27日にカラカスで暴動が発生した」と回想した。

また、当時を振り返り、「流血の惨事となった1989年2月27日は、国民がネオリベラリズム、ワシントン・コンセンサス、国際通貨基金 (International Monetary Fund:IMF) のやり方に「NO」と声を挙げた日であった。我々は、国軍が国民を殺戮している状況に対応し個々のレベルで行動を起こすしかなく、この大惨事を前に自分達に何の手立てもなかったことを責め、心痛め、涙するしかなかった。国民の兵士となるべき国軍が、自らの国民を攻撃するような行動をとったことは許されざることであった」と述べている (このカラカス大暴動で、EBR-200、MBR-200の創設メンバーであるフェリペ・アコスタ・カルレス陸軍少佐が逝去)。このカラカス大暴動を機に、MBR-200の活動は再活性化し、強化されていった。

(ホ) クーデター未遂事件 (4F 事件)

1992年2月4日、陸軍マラカイ司令部空挺部隊隊長であったチャベス中佐は、フランシスコ・アリアス・カルデナス (Francisco Arias Cárdenas。陸軍中佐)¹⁵⁾等陸軍の一部士官と共謀して、第二次カルロス・アンドレス・ペレス政権に対してクーデターを試みたが、失敗に終わる。投降後逮捕され、政府側の判断により、空挺部隊のベレー帽と軍服姿のままテレビ出演させられ、「残念ながら、今回は、我々の目的は達成されなかった」、「ポリーバル軍事運動の責任は自分にある」と短い演説を行い、地方の反乱軍に投降を呼びかけた。チャベスはヤーレ刑務所に収監されるが、1994年3月に軍籍離脱を条件にラファエル・カルデラ大統領 (当時) に赦免された後、MBR-200を市民組織に改組し、民主的な方法で政権を掌握すべく、政

15) アリアス・カルデナスは1996年からスリア州知事を2期務めた後、チャベスと袂を分かち、2000年7月の大統領選挙に立候補するが、同氏に敗北。自ら結成した団結党 (UNIÓN) の党首でもあり、2004年再び与党に鞍替えした。

治活動に専念することになる。政党法上、個人の氏名に関連した政党名では登録できなかったことから、1997年7月、MBR-200から第五共和国運動党(MVR)¹⁶⁾に改称し、1998年12月の大統領選挙で勝利して、1999年2月にチャベス政権が発足した。

この背景として、1958年の民政移管以降続いてきた、民主行動党(Acción Democrática: AD。中道左派)及びキリスト教社会党(Partido Social Cristiano: COPEI。中道右派)による二大政党体制が生んだ腐敗政治に対する国民の不信感の高まりを指摘できる。そうした状況の中で、深刻化している貧困や汚職の問題は伝統的政治体制の産物であるとして、過去の政権を激しく糾弾し、これらの問題を解決することを約束すると共に、社会福祉の充実や治安改善等を訴えたチャベス候補が、中・低所得者層の期待票を集めたのも当然であった。

2. ポリーバル革命の思想的側面

(1) ポリーバル革命の提唱

1999年2月に新政権が発足してから6年半以上が経過するが、チャベス大統領は、自ら推進している政治、社会、経済分野における変革を「ポリーバル革命」と称している。但し、大統領就任前後は、革命という言葉の持つ否定的な響きを意識してか、或いは、自身の中でポリーバル革命という名称が定着していなかったのか、公の席でポリーバル革命という言葉を使用したことはなかったようである。しかしながら、ポリーバル革命の着想がかなり前からチャベス氏自身の中に生まれていたことは、1982年に自ら結成した地下組織をポリーバル革命軍200(BER-200)と称

16)「第五共和国運動党」の名称は、1811年、1814年に一時期成立した2つのベネズエラ共和国、及び1821年のシモン・ボリーバルによるグラン・コロンビア共和国に続いて、1830年に成立したベネズエラ共和国を「第四共和国」と捉え、チャベス大統領による新体制を「第五共和国」とする独自の歴史観に由来。但し、同大統領が「第四共和国」という言葉を使う場合、1958年の民政移管後のADとCOPEIの二大政党体制に基づく時代を意味することも多い。

していたことでも明らかであろう。

チャベスは、政治活動を行っていた1995年6月、「ポリーバル主義者という名称が革命主義者を代表しているという自覚に基づき、我々の運動をポリーバル革命運動と称している」と説明している¹⁷⁾。また、その他の機会でも、「1986年に開催されたMBR-200の第一回会合を契機に、同組織の土台となる思想や哲学について、即ちシモン・ポリーバル、シモン・ロドリゲス、エセキエル・サモーラ、フランシスコ・デ・ミランダ (Francisco de Miranda) 等の思想につき日々深く学び、内省し、議論すると共に、組織としてのイデオロギーや革命の定義を決定した」と述べている他、「誰も独創的な思想の持ち主はいない。マルクス (の思想) もそうであり、その思想は多くの思想、研究、熟慮の結果の産物である」、「我々は新しい教義を確立中である。これは、分散化している既存の思想を再確立する作業でもある」と述べている¹⁸⁾。

(2) 3つの根から成る樹木

(イ) 歴史的英雄

ポリーバル革命、MVRの前身であるEBR-200及MBR-200で用いられている「ポリーバル」は、南米の解放者シモン・ポリーバルの名に因んだものである。しかしながら、1995年には、「ポリーバルだけが我々の思想や計画の最高峰ではない。イデオロギー的、象徴的かつ歴史的な展望を広げるために、(我々の思想の)構成要素として、ポリーバルと共にシモン・ロドリゲス及びエセキエル・サモーラといった思想家を加えた¹⁹⁾、「これら3名の思想の間には関連性があり、一つのシステムを形成し得ると考えた²⁰⁾と述べているように、ポリーバル革命の根幹を

17) 文献A、109頁。

18) 文献A、73頁。

19) 文献A、109頁。

20) 文献A、68頁。

形成しているのは右3名の歴史的英雄の思想であり、チャベス大統領はこれらの思想を樹木の根に例え、ボリーバル革命を「3つの根から成る樹木」(Árbol de las Tres Raíces)と称している。

社会学者のマルタ・ハーネッカー (Marta Harnecker) によれば²¹⁾、スペインからの独立戦争の中で最も傑出した英雄であったシモン・ボリーバル (1783-1830年) は、奴隷制の廃止を主張すると共に、常に貧困層を考慮に入れ、ラテンアメリカの統合の必要性を説いた。ボリーバルは当時既に、ラテンアメリカが共に団結して、欧州諸国や米国に立ち向かわなければ、同地域の将来はないという立場を示しており、民主主義とは国民に最大幸福を与えるべき政治システムであり、軍人は国民に対して決して武器を向けるべきではないという信条を有していた。

他方、ボリーバルの恩師で独立運動に参加した教育者、哲学者かつ社会改革者であったシモン・ロドリゲス (1769-1854年。ボリーバルは同人を「ソクラテス」と称した) は、ラテンアメリカの独創性、多民族主義に基づく国民構成、ラテンアメリカ社会に先住民及び黒人奴隷を将来的に統合することの必要性を主張し、ラテンアメリカの現実に即した独自の制度の設立を提唱すると共に、欧州型の解決策を模倣することを拒否する立場を取った。

また、エセキエル・サモラ (1817-1860年) は、19世紀を代表するカウディージョ (Caudillo。西語で指導者、統領の意) で、1850年代に連邦派として当時のパエス大統領派と闘った將軍であるが、農地改革の重要性を強調し、当時の寡頭支配層と闘争して農民に土地を譲渡したことで知られており、チャベスによれば、社会的平等に基づき、土地と人の解放という概念を提起した人物であった。

ハーネッカーは、上記3名を、反帝国主義及び反寡頭政治を掲げて国家主権を擁護する民主的な理念の核となるべき思想を形成した人物であるとし、これらの信条には革命プロセスを進展させるための鍵となるべき理念を伴っていると指摘している。

21) 文献E、15-18項。

(ロ) 「3つの根から成る樹木」とボリーバル革命

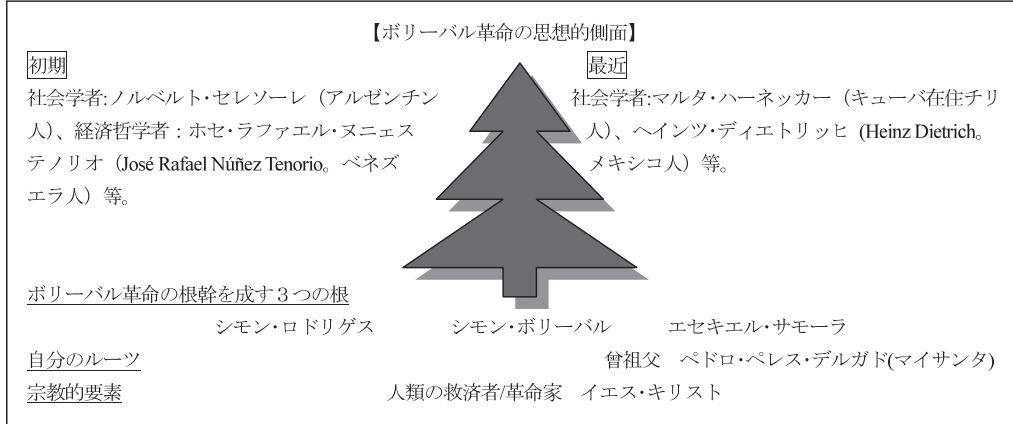
この「3つの根から成る樹木」は、既にドゥグラス・ブラボが同様の思想を提唱している他²²⁾、歴史家をはじめ、類似した主張を行っている例もあり、チャベスの独創とは言えない。しかしながら、チャベスは、「シモン・ロドリゲスが言っていたように、我々は独自のイデオロギー上の象徴を築く必要がある。中南米は(西洋の思想を)模倣し続けることはできない」と述べ²³⁾、この「3つの根から成る樹木」を独創的な思想として提唱し、「3つの根から成る樹木」を生長させるためには、水、太陽、風、肥料が必要であり、これらを総合したものが自分達の思想を形成する」と主張している。

また1995年4月には、「3は、3つの根と像を指しているが、思想の源の要素は3つだけではなく500にも拡大できるものである。3つの根から成る樹木は、幹や枝を持ち、葉を茂らせている。成長するためには大気、太陽の光を必要としていることから、太陽から日陰に至る迄、樹木にとっての源となる。皆が太陽や風になれる訳ではない。この3つの根は、国家建設プロジェクトの理念を伴い、他の多くの要素と共に一つになっている」²⁴⁾と表現している。これに従うと、フアン・ピセンテ・ゴメス政権時代、シプリアーノ・カストロ派の将軍として反旗を翻して闘い、かつ農民革命の指導者でもあった曾祖父のペドロ・ペレス・デルガド(マイサンタ)もボリーバル革命の思想的根幹の要素の一つに含めることができよう。

22) 文献B、15頁。

23) 文献A、116頁。

24) 文献A、74-75頁。



(3) チャベス大統領の特徴

以上見てきたように、チャベスが提唱するボリーバル革命は、3名の歴史上の人物の思想を根幹に据えており、民族主義的色彩が濃いことが窺える。このボリーバル革命は、第一与党であるMVRの政治思想というよりも、チャベス個人の主張・特徴が反映されたものと言えるが、以下では、チャベスが有する革命家、左派、軍人主義という3つの性質を分析してみたい。

(イ) 革命家

チャベスは過去に、「ボリーバル主義者であることは一つの補完的な要素に過ぎず、自分はボリーバル主義者である以上に革命家であると感じている」と告白しているように²⁵⁾、常に革命家としての性格を打ち出してきた。更に、10年前の1995年6月には、「革命的であることは生き方についての概念である。革命とは、全体的で急進的な変革を通じてベネズエラにとって必要な道を整えることである。政治的な革命、文化面での革命、倫理的な革命なくして経済の革命は存在し得ない。これは総合的な概念である」との考えも示している²⁶⁾。

25) 文献A、109頁。

26) 文献A、115頁。

チャベスは、1992年2月にクーデターを首謀した点を踏まえれば、武装蜂起を正当化する立場を取ってきたと言えるが、大統領となった今日、革命という言葉を使用する時には、武力を伴うものではなく、平和的で民主的なものであると主張していることに留意する必要がある。ただ、他国の干渉があった時には革命は武装化されるべきであると主張している。

(ロ) 左派思想

チャベス政権がキューバや中国等の共産主義国と良好な関係を結んでいることから、ベネズエラが共産化するのではないかという懸念も多く聞かれてきたが、チャベスの主張する「ポリーバル革命」は、共産主義的な思想を土台にしている訳ではない。チャベスはキューバのフィデル・カストロ (Fidel Castro) 国家評議会議長を非常に尊敬する人物であるとしながらも、ベネズエラの共産化については繰り返し否定してきており、自身も共産主義者ではないと断言している。2003年6月には、「自分が仮に共産主義者であったとしても、現在のベネズエラで推進しているプロジェクトは共産主義思想ではなく、1999年憲法に基づくものである。また、ポリーバル・プロジェクトは思想的、教条的には共産主義とは相容れないものであり、同プロジェクトを共産主義的と評価するのは間違っている」との発言を行っている。

一方で、チャベスの言動から、社会民主主義或いはキリスト教社会主義ではないかとの声も聞かれるが、この点については、1995年6月、ADやCOPEIの政策が本来の理論を実践していないとして、思想上のイニシアティブではなく自らの政党の利害を中心に動く伝統政党につき批判すると共に、ベネズエラにおける社会民主主義及びキリスト教社会主義の双方を拒否している。また、「ナザレのキリストは最初の革命家の一人であると言われるが、自分もそのように理解し、解釈している。神はキリストであり、(ローマ)帝国と自らの民のために闘争するために十字架につけられたキリストである。キリスト教の教義によると、キリストは十字架から降ろされた後、蘇り、貧困者のために闘うために世界に出て行った。即ち、キリストは国民の中を歩き、深い変革と革命のために闘ったのである」と述べ、キリスト教社会主義はこの歴史的なキリストの真実から非常にかけ離れたものであると批判し

ている²⁷⁾。この点については、現在も同様の立場を取っていると置いていいだろう。

(ハ) 軍人主義

チャベスは未遂に終わった1992年2月のクーデターを首謀したことで、1994年に軍籍を剥奪されたが、軍人としての自覚は同氏を構成する重要な要素となっている。とは言え、現在のところ、軍事力で権力を掌握するといった軍事政権を目指してはいない。カウディージョ及び国民と共に、新たな政治モデルの三本柱の一つに国軍を据えようとするチャベスの試みは、アルゼンチンの社会学者ノルベルト・セレスオーレ (Norberto Ceresole) の理論と合致するものであった。チャベスは、政権発足当初の目玉であった「ボリーバル・プラン2000」をはじめ、政権内で軍人を活用し、軍民共同のプロジェクトを推進してきた。これに対しては、国軍の政治化であり、国防及び安全保障という国軍の本来の役割が軽視されているのではないかとの批判もなされてきた。

チャベス大統領の政策は、国家を強化し、自国の利益を追求するために軍備の拡充を図り、戦争を通じて国威を高めようとする目的は有していないので、軍事主義と言うことはできないが、軍人を重要ポストに多用することから、軍人主義に基づくとの指摘もある。現政権は、閣僚、地方自治体の長、国会議員のポストに、国軍出身者が一定の割合を占めていることを特徴とする。州知事では24人中10人が軍人出身者(ヘスス・アギラルテ (Jesús Aguilarte) アプーレ州知事(陸軍大尉)、フランシスコ・ランヘル・ゴメス (Francisco Rangel Gómez) ボリーバル州知事(陸軍中將)、ジョニー・ヤネス・ランヘル (Johny Yáñez Rangel) コヘーデス州知事(国家警備軍(GN)中佐)、ルイス・フェリペ・アコスタ・カルレス (Luis Felipe Acosta Carlez) カラボボ州知事、イエリツァ・サンタエジャ (Yelitza Santaella) デルタ・アマクロ州知事(GN少將)、ルイス・レイエス・レイエス (Luis Reyes Reyes) ララ州知事(空軍中佐)、フロレンシオ・ポーラス (Florencio Porras) メリダ州知事(陸軍中尉)、ロナルド・ブランコ・ラ・クルス (Ronald Blanco La Cruz) タチラ州知事

27) 文献A、119頁。

(陸軍大尉)、アントニオ・ロドリゲス (Antonio Rodríguez) バルガス州知事 (GN 少佐) 及びディオスダード・カベージョ (Diosdado Cabello) ミランダ州知事 (陸軍中尉)。全て退役) で、その多くが1992年2月或いは同年11月のクーデター未遂事件に関与している。

また、現閣僚については、24人中6人 (ジェシー・チャコン (Jesse Chacón) 内務司法大臣 (陸軍中尉)、ラモン・マニグリア (Ramon Maniglia) 国防大臣 (海軍大将)、ホルヘ・ガルシア・カルネイロ (Jorge García Carneiro) 国民参加・社会開発大臣 (陸軍大将)、ウィルマル・カストロ (Wilmar Castro) 観光大臣 (空軍中佐)、ラモン・カリサレス (Ramón Carrizales) インフラ大臣 (陸軍大佐) 及びラファエル・オロペサ (Rafael Oropeza) 食糧大臣 (陸軍少将)。国防大臣以外は退役) が軍出身であり、ホセ・ビエルマ・モラ (José Vielma Mora) 徴税庁 (SENIAT) 長官 (陸軍大尉)、エリエセル・オタイサ (Eliécer Otaiza) 前土地開発庁 (INTI) 長官 (陸軍大尉) をはじめ、国家機関の重要ポストにも元軍人が就いており、1992年2月のクーデター未遂事件の関与者を重用する人事となっている。

3. 左派政党とボリーバル革命

チャベス政権下では、MVRが中心となり、社会民主主義党 (Por la Democracia Social : PODEMOS)、「皆のための祖国党」 (Patria Para Todos : PPT) 等が与党を構成しているが、必ずしも与党が左派、野党が右派の図式になっている訳ではない。野党内の左派政党としては、AD、社会主義運動党 (Movimiento al Socialismo : MAS)、LCR、社会民主グループ (Grupo Social Demócrata : GSD) 等が挙げられ、過去に分裂・統合等の経過を経ている。与党第一党であるMVRは、他の左派政党と異なり所謂伝統的な政治思想を有していないが、国際的には左派政党として認識されている。以下では、ベネズエラの左派政党の歴史的な流れを追い、MVRの位置付けを考察したい²⁸⁾。

28) 第3節は主に文献I、J、ベネズエラでの報道振りを参照。

(1) 伝統左派政党の歴史

ベネズエラでは、フアン・ピセンテ・ゴメス大統領の独裁政権下の1931年にベネズエラ共産党が創設され、労働運動と共に次第に勢力を伸ばし、ゴメス政権後の権威主義体制下ではADの前身と共に有力野党となった。共産党から武装手段を主張する民族解放武装勢力 (Fuerzas Armadas de Liberación Nacional : FALN) 及びFLNが生まれ、これらグループはゲリラ組織として非合法活動を行うことになるが、合法的な存在の共産党が暫くは裏で支援する形をとった。1960年代にゲリラ活動に参加し、1971年のMAS創設のメンバーとなったテオドロ・ペトコフ (Teodoro Petkoff) 「TAL CUAL」紙現編集長 (元企画開発大臣)、ポンペーヨ・マルケス (Pompeyo Márquez) 左翼民主党 (Izquierda Democrática : ID) 現幹部 (団結党 (UNIÓN) 元幹部)、及びゲリラ活動後国会議員となり、LCRを経て、現在はPPT幹部であるアリ・ロドリゲス (Alí Rodríguez) 現外務大臣等は代表的な人物である。

しかしながら、ゲリラ勢力は、第一次カルデラ政権時の融和政策の結果、1970年以降は衰退し、1971年には前述したMASやLCRが各々結成された。その後、MASは派閥闘争を経て、第二次カルデラ政権下で連立与党として活動した後、1999年2月のチャベス政権発足当初は与党連合の一部を形成する。しかしながら、その後、再び内部分裂が生じ、同年11月の党執行部選挙で親チャベス派と反チャベス派に分裂した結果、反チャベス派が社会主義運動党の名称を継承し、2002年8月にMASの親チャベス派はPODEMOSを結成した。現在MASは野党、PODEMOSは与党となっている。他方、LCRについては、1997年にホセ・アルボルノス (José Arbornos。現PPT書記長)、アリ・ロドリゲス現外務大臣、アリストプロ・イストゥリス (Aristóbulo Istúriz) 現教育・スポーツ大臣等が、分派のPPTを結成。現在、LCRが野党、PPTが与党として活動している。他方、これらの政党の母体政党とも言えるベネズエラ共産党については、現在国会に議席を有しておらず、少数政党に転じている。

1941年に設立され、1958年の民政移管以降、伝統政党であったADは、社会民

主義路線の社会主義インターの加盟政党でもある。ADからは1967年に大衆選挙運動 (Movimiento Electoral del Pueblo : MEP) が分派、設立された (現与党) 他、2000年に「勇敢な国民同盟党」 (Alianza Bravo Pueblo : ABP) がADから分離し、更にABPが分かれ、2003年にはGSDが結成された。他方、ホビト・ビジャルバ (Jovito Villalba) 等により1946年に設立され、ADとCOPEIと共に1958年のプント・フィ合意にも署名した民主共和同盟 (Unión Republicana Democrática : URD) も中道左派政党であった。ホセ・ビセンテ・ランヘル (José Vicente Rangel) 副大統領やチャベス政権の初期メンバーとして重要な役割を担った企業家のルイス・ミキレナ (Luis Miquilena) 等がURDに所属していたが、現在、事実上消滅している。

【ベネズエラ左派政党の特徴】

政党名	創設年	傾向	その他
ベネズエラ共産党(PCV)	1931年	極左→左派	与党 現在は少数政党。
民主行動党(AD)	1941年	中道左派	野党 社会民主主義政党。支持基盤は組織労働者階級、中流階級 国会議席数:23。
大衆選挙運動党(MEP)	1967年	中道左派	与党 ADから分派。
赤旗党(Bandera Roja : BR)	1970年	極左→左派	野党 ゲリラ組織から合法組織へ。マルクス・レーニン主義。
社会主義運動党(MAS)	1971年	左派→中道左派	野党 共産党右派から分裂。国会議席数:11。
急進大義党(LCR)	1971年	左派→中道左派	野党 共産党から分派。ボリーバル州の労働運動を中心とするグループとして開始。国会議席数:3。
社会主義リーグ (Liga Socialista:LS)	1973年	左派	与党 現在は少数政党。
第五共和国運動党(MVR)	1997年	左派	与党 チャベス政権第一与党。国会議席数:69。
「皆のための祖国」党(PPT)	1997年	左派	与党 LCRから分派。国会議席数:1。
「勇敢な国民同盟」党(ABP)	2000年	中道左派	野党 ADから分派。
団結党(UNIÓN)	2000年	中道左派	野党 社会民主主義政党。党首はアリアス・カルデナス元大統領候補。2004年8月以降再び与党に。
社会民主主義党(PODEMOS)	2002年	左派	与党 MASのチャベス派が離党して結成。国会議席数 8。
社会民主グループ(GSD)	2003年	中道左派	野党 ABPから分派。国会議席数:4。
ベネズエラ民衆団結党(Unión Popular Venezolana : UPV)	2004年	左派	与党 市民グループから発展。国会議席数:1。
左翼民主党(ID)	2004年	中道左派	野党 UNIÓNから分離。

(2005年9月現在)

(2) 第五共和国運動党 (MVR) の位置付け

(イ) 伝統左派政党との関係

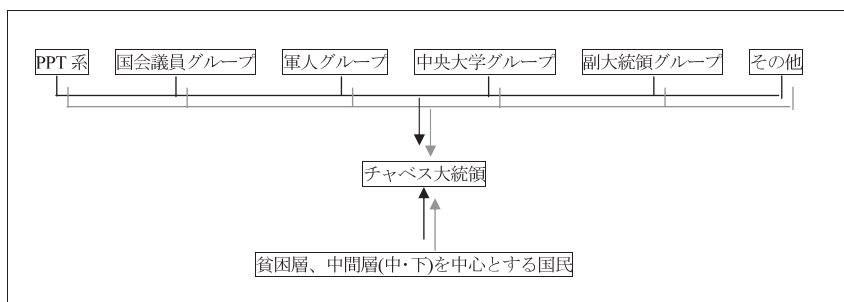
与党第一党であるMVRは伝統的左派政党から直接派生した政党ではなく、軍人であったチャベスを中心として結成された地下組織から、選挙に臨むために政党

として登録されたという経緯を持つ。もちろん、MVRの前身であるEBR-200やMBR-200の背景には、何らかの上記伝統政党の影響が存在したことは間違いないであろう。例えば、チャベス自身は、国立ロス・アンデス大学（メリダ州）の学生であった実兄アダン・チャベス（現駐キューバ大使）や同人の友人ネルソン・サンチェス（Nelson Sanchez）等を通じて、共産主義及び社会主義思想の洗礼を受けている他、チャベスのグループとは別にR83やARMAを結成した共産主義者で、空軍出身のウィリアム・イサーラ現外務次官が、MBR-200の幹部に加わっている。チャベス氏はFANのドゥグラス・ブラボやLCRのパブロ・メディーナとも接触する等、現在のMVRが結成される過程で多くの左派グループの指導者と接触した。

（ロ）地下組織から政党へ

1992年2月4日にクーデター未遂事件を起こしたチャベスは、ヤーレ刑務所に収監されるが、収監中に新しい関係が構築され、その後のMVRのブレインとなる人々も含まれている。MBR-200のメンバーも、軍人が中心であったクーデター未遂前と、有識者や政治家が加わった未遂後では、その構成員に変容が見られた。また、革命達成のためには暴力的手段も辞さないとする当初の考え方が、選挙を通じた民主的な方法でというように変わったのは、ヤーレ刑務所時代に出会った企業家ルイス・ミキレナや中央大学関係者等有識者の助言の影響も大きいと言われている。MVRは現在、PODEMOSやPPT等と共に左派系の与党連合を結成しているが、党派主義に基づく政党ではなく、その名の通り、流動性を伴う運動という性格が強い。現在、チャベス大統領の支持層は下記のように幾つかのグループに大別することができる。

【チャベス大統領の国内支持層】



グループ	代表的人物
「皆のための祖国党」(PPT)系	アリ・ロドリゲス外務大臣、アリストプロ・イストゥリス教育・スポーツ大臣、マリア・クリスティーナ・イグレスィアス(María Cristina Iglesias)労働大臣、ベルナルド・アルバレス(Bernardo Alvarez)駐米大使、ホセ・アルボルノス PPT 書記長等。
国会議員グループ(MVR が中心)	ニコラス・マドゥーロ(Nicolás Maduro)国会議長、シリア・フローレス(Cilia Flores)議員、フアン・バレート(Juan Barreto)カラカス首都区長官(マドゥーロ派)、ルイス・タスコン(Luis Tascón)議員、イリス・バレーラ(Iris Varela)議員、ウィリアン・ララ(William Lara)議員等(同グループ内でも更に複数のグループに分類可能)。
軍人グループ	現役:メルビン・ロペス・イダルゴ(Melvin López Hidalgo)国軍司令官(陸軍中将)、ラウル・バドゥエル陸軍司令官(陸軍中将)、ラモン・マニグリア国防大臣(海軍大将)、プリオ・キンテロ・ピロリア(Julio Quintero Vilorio)予備役・国家動員司令部司令官(陸軍中将)等。 退役:ディオスタード・カベージョ・ミランダ州知事(陸軍中尉(退))、ジェシー・チャコン内務司法大臣(陸軍中尉(退))。カベージョ派、州知事グループ(上記2.(3)(*)参照)、ホルヘ・ガルシア・カルネイロ国民参加・社会開発大臣(前国防大臣。陸軍大将(退))等。
中央大学グループ	ホルヘ・ジョルダニ(Jorge Giordani)企画開発大臣、サムエル・モンカーダ(Samuel Moncada)高等教育大臣、ネルソン・メレンテス(Nelson Merentes)財務大臣等。
ランヘル副大統領グループ	ホセ・ビセンテ・ランヘル・アバロス(José Vicente Rangel Ávalos)カラカス首都区スクレ市長(副大統領長男)、クロドバルド・ルシアン(Clodovaldo Russián)会計検査院長、オマール・モラ(Omar Mora)最高裁長官等。(ランヘル副大統領は民間企業、マスコミ、野党 AD 関係者とのパイプも厚い。)

(2005年9月現在)

4. ボリーバル革命の実践

(1) 概要

以上、ボリーバル革命及び同思想に基づくチャベス政権の特徴を見てきたが、チャベス政権が発足して6年半以上が経過した現在、実践面でも既に何段階かを経ているとすることができる。第1段階は、ボリーバル革命の基盤作りとなる新憲法の制定、第2段階は法的枠組形成のための大統領授權法を通じた49法の成立及び反政府勢力の台頭、第3段階は国内政治危機と反政府派との交渉によるボリーバル革命の存続・深化に必要な戦い、第4段階は、各種社会政策の推進による実績の積み重ね、第5段階は、ボリーバル革命を掲げた多極主義に基づく外交政策の展開、及び「21世紀型社会主義」の対外的な普及、と大別することができよう。チャベス自身の定義に基づくボリーバル革命の段階的推移については、下記に記す通りである。

政権発足当初には、上記第1段階、第2段階辺りまではある程度具体的な政策があったと思われるが、それ以降の定義付けは結果論であり、時勢を踏まえてその都度政策を変える、或いは時勢に合わせた形式を適用していると見られる。

【ボリーバル革命の段階的推移】

年	主な出来事	チャベス大統領による定義 ²⁹⁾
1999	チャベス政権の発足	制憲議会及びボリーバル共和国憲法の誕生の年。
2000	新憲法に基づくメガ選挙	権力の再確認(選挙)と第五共和国の正当性を再認識の年。
2001	反政府運動の開始	大統領授権法に基づく法律制定の年/反革命の動きが芽生えた年。
2002	反政府勢力の台頭 (政変、ゼネスト)	革命の生死がかかった年として始まり、結果的には、神が我々の存続と第五共和国及び祖国が生き延びることを望んだ年/ベネズエラに対する帝国主義的な攻撃の年。
2003	政治的危機の民主的解決に向けた 政府・反政府の交渉プロセス	革命に対する攻撃の年/各種分野における攻勢の年(貧困層の社会参加と正義を追求する「ミッション」と称される社会政策が誕生した年)。
2004	大統領罷免国民投票の実施 (チャベス大統領の勝利) 2006年迄の政府戦略目標を設定	政治的にも国家としても革命に向け大勝利を取った年であり、また、国民所得の拡大や再配分という観点からも経済の新しい循環の基礎が構築された年。外交分野における攻勢の年/政治的なビッグバンの年。
2005	多極化主義に基づく外交政策 国会議員選挙	経済及び社会分野における大躍進の年。
2006	大統領選挙	

(2) 国内戦略

(イ) 第1段階：ボリーバル革命の基盤作り

チャベスは大統領になる前の1995年6月の時点で、「主権及び決定に基づいた、前進に必要な能力を国民に返すための一歩として、制憲議会は必要な段階である」と³⁰⁾述べているように、当時から制憲議会を開催し、国家の変革を平和的に実行する手段として、新憲法制定の重要性を主張してきた。1999年2月2日の大統領宣誓式の際、1961年制定の憲法を指して「瀕死の(moribunda)憲法に誓う」と述べたことは有名なエピソードであり、宣誓式の日には大統領令を公布し、制憲議会の是非を問う国民投票の実施を決定したことを発表した後、同年8月に制憲議会を発足させ、12月に新憲法を制定した。新憲法は、大統領権限の強化、国会の二院制から一院制への移行、従来の3権に加えた2権力(選挙権力及び市民権力)の創設、参加型民主主義の概念に基づく諮問国民投票、罷免国民投票等の導入、人権擁護の強化等を特徴とするが³¹⁾、シモン・ボリーバルの名に因んで国名を「ベネズエラ共和国」から「ベネズエラ・ボリーバル共和国」に変えたことでも、チャベスのこだ

29) 国会での大統領教書の発表(2005年1月14日)、及びチャベス政権発足6周年記念演説(2005年2月2日)における発言の聞き取り。

30) 文献A、167頁。

31) 文献D。

わりを窺うことができよう。

また、チャベスは1999年2月2日に就任してから僅か20日後に、軍民共同の社会協力計画「ボリーバル・プラン2000」を発表し、同プランの下で、保健衛生事業、児童向け給食サービスの実施、道路・学校・住宅の建設・補修を推進し、従来の公立学校を総合的に改善するボリーバル学校の建設やマイクロ・クレジットを通じた零細企業の振興、低価格で食料品を提供する食料供給計画等を実施した。また、大衆市場の開設や移動式食料販売車の巡回、無料診察、無料理髪サービスも実施した。

(ロ) 第2段階：法律制定と反政府勢力の台頭

1999年12月に公布された新憲法に従って総選挙を行った結果、2000年7月にチャベスは大統領に再選。同年11月より1年間、国会審議を経ずに法案を成立させる権限を大統領に付与する大統領授権法を通じて、2001年11月に土地・農村開発法や炭化水素法を含む49の経済・社会、金融、インフラ・運輸等の関連法を制定し、法的基盤を固めた。しかしながら、この法律制定こそが、反政府勢力の台頭を促すきっかけとなるのである。「ボリーバル・プラン2000」も、同プランを巡る汚職問題等が浮上したため、自然消滅した。

政府が大統領授権法を通じて制定したこれら関連法を、民間セクターとの事前協議を行わずに独断的に成立させたとして、2001年12月に、国内最大規模の経済団体であるベネズエラ経団連 (Federación Venezolana de Cámaras y Asociaciones de Comercio y Producción : FEDECAMARAS) がベネズエラ労働者総連盟 (Confederación de Trabajadores de Venezuela : CTV) に呼びかけてゼネストを実施。これを発端として、チャベス大統領の強権的な政治手法に対する不満や反発が具体的な形で抗議行動となり表面化していった。これが、2002年4月の政変へと繋がり、チャベス大統領が辞任に追い込まれたため、カルモナ FEDECAMARAS 会長を暫定大統領とする暫定政権が一時的に発足した。しかしながら、同政権は、国会の機能を停止し、公権力の長を解任する等、憲法及び民主主義を侵害する手法をとったため、国軍が反発し、辞任僅か2日後にチャベス大統領の復権を導いた。

(ハ) 第3段階：国内政治危機

2002年4月の政変でチャベスは復権したものの、政治危機の終了を意味せず、新たな戦いが始まった。各セクターとの対話・融和に取り組むものの、同年末になり反政府運動が再燃。同年12月から約2ヶ月間に亘り、大統領辞任を求める全国規模のゼネストが行われる。石油セクターが参加したことから、国内経済は大きな打撃を被るが、これを契機にチャベスはベネズエラ石油公社 (PDVSA) 内での権限を強化していく。

他方、2002年11月にセサル・ガビリア (César Gaviria) 米州機構 (Organization of American States : OAS) 事務総長 (当時) の仲介を得て設置された「交渉及び合意のためのテーブル」を通じて、政府及び反政府派の代表者が選挙を通じた危機解決を中心テーマに対話を行った結果、2003年5月に両者は大統領罷免国民投票の実施を含む合意文書に署名した。右合意を踏まえ、2005年8月15日に大統領罷免国民投票が実施され、チャベスの罷免が否決される結果となった。政府派、反政府派の何れが勝利してもおかしくないとの大方の予想に反し、罷免反対580万票、罷免賛成が399万票と、チャベスは180万票近い差をつけて圧勝した。仮に罷免賛成が罷免反対を上回っていたとすれば、2005年9月の現時点でのベネズエラの政治的シナリオは大きく変わっていたであろう。この政治危機は、その解決策としての大統領罷免国民投票を通じて合法的に勝利したという意味において、ポリーバル革命の存続・深化にとって必要なプロセスであったとも言えよう。

(二) 第4段階：社会政策の推進

第3段階と重なる部分もあるが、チャベス政権は2003年以降、貧困層を対象にした各種社会政策を「ミッション」と称して積極的に推進する。開始時期から、選挙対策、大統領罷免国民投票対策であるとして批判されてきたが、識字率向上計画 (「ロビンソン・ミッション」)、医療サービスの提供を中心とする社会開発計画 (「バリオ・アデントロ・ミッション」)、職業訓練・雇用創出計画 (「ブエルバン・カラス・ミッション」)、農地改革計画 (「サモーラ・ミッション」) 等、教育、保健医療、労働、土地再配分の分野において、国民の立場に立った社会政策として打ち出

した。第1段階で推進した「ボリーバル・プラン2000」のプロジェクトの内容と類似した計画もあるが、命名に趣向を凝らすだけでなく、奨学金や各種手当での支給を通じて参加者数を増やしていくという手法をとった。2005年9月現在、17のミッションが存在するが、必ずしも全てが機能している訳ではない。例えば、2003年10月に発表された予備兵強化のための「ミランダ・ミッション」は、2005年4月には予備兵・国家動員司令部の創設が発表され、既に事実上終了している。2005年9月現在、この第4段階を邁進中であると同時に、第5段階も進行している。

(3) 対外戦略

(イ) ボリーバル革命の第5段階

チャベス大統領は、2004年8月の大統領罷免国民投票で勝利した後、国内問題が一段落したこともあり、積極的な外交政策を展開し、米国のイニシティブによる米州貿易地域 (Free Trade Area of the Americas : FTAA) 及びネオリベラリズムに対抗して、ラテンアメリカの自立を目指して、独自の地域統合を推進しようとしている。序章でも言及したが、チャベス大統領は、2005年8月15日、国会主催で開催された「モンテ・サクロの誓い」200周年記念行事において、当時のシモン・ボリーバルの誓いの言葉を借り、「スペイン」を「米国」に変えて、「我々にのし掛かる米国の帝国主義の脅威から国民を解放するまで、我々の腕に休息を与えず、魂に安らぎを与えないと誓い、約束しなければならない」と演説した。これに示されるとおり、チャベス大統領が推進している地域統合は、米国からの解放という意味を有している。

近年の原油価格の高騰は、各種社会ミッションをはじめとする国内での政府の活動を支えているだけでなく、石油を外交戦略の手段として利用することを可能にしており、チャベス大統領はシモン・ボリーバルが果たせなかったラテンアメリカ統合の夢を果たすべく、最近は特に積極的な石油外交を展開している。ペトロスール (PETROSUR)、ペトロカリブ (PETROCARIBE)、ペトロアメリカ (PETROAMERICA) 等、地域のエネルギー協力協定の締結を推進し、更に、石油分野に限らず、2004年7月には国際放送局テレスール (TELESUR) を開局し、ラテンアメリカ人として

のアイデンティティーの強化を目的とするような放送を開始した。未だ成果が出る段階にはないものの、こうした地域統合に向けた動きを中心とする対外戦略を、ポリーバル革命の第5段階と定義付けることができるのではないかと。この第5段階は、チャベスにとって、ベネズエラ国内だけでなく、ラテンアメリカ全体を対象とするポリーバル革命の実践という点で、重要な意味を持っている。

(ロ) 南米共同体の創設

2004年12月8日にペルーのクスコ市で開催された第3回南米サミットでは、メルコスール及びアンデス共同体の加盟国、並びにチリ、スリナム、ガイアナが加わった南米12カ国が、南米共同体 (La Comunidad Sudamericana de Naciones : CSN (西)、The South American Community of Nations (英)) の創設に関するクスコ宣言に合意した。将来的な目標として、欧州連合 (European Union : EU) 型の共同市場の創設を掲げているが、クスコ宣言の中では、「政治、社会、経済、環境、インフラの分野を統合することで、南米地域を発展させることを決意する」と明記され、これが南米独自のアイデンティティーを深め、ラテンアメリカ及びカリブを強化することに繋がり、国際場裡において大きな重みを与えることになるであろうと記されている³²⁾。

また、上記サミットに続いて、12月9日には「アヤクーチョの戦い180周年記念式典」が開催され、そこで採択された「アヤクーチョ宣言」では、南米共同体の創設を歓迎し、南米インフラ統合計画を全面的に支持することが明記された。1824年12月9日に中南米を独立させようとするシモン・ポリーバルと、中南米に残っていた最後のスペインの軍勢がアヤクーチョ郊外で戦った「アヤクーチョの戦い」では、ポリーバル軍が勝利し、コロンブスの航海以来300年間に亘るスペインの中南米支配を終了させた。イスマノアメリカの独立を決定付けるとの意義を有しており³³⁾、チャベスもベネズエラ大統領として、アヤクーチョの戦いの意義に思い

32) 文献Gの記事 (www.rnv.gov.ve/noticias/index.php?act=ST&f=18&t=1139)。

33) 文献K、154-155頁。

を馳せつつ、記念式典に臨んだのであろう。

(ハ) ベネズエラ主導の米州ポリーバル代替統合構想 (ALBA)

南米共同体創設のような地域組織の枠組み内での動きと並行して、チャベス大統領は、ベネズエラ主導の米州ポリーバル代替統合構想 (Alternativa Bolivariana para las Americas : ALBA (西)、The Bolivarian Alternative for the Americas (英))³⁴⁾ を提唱している。2001年4月にカナダのケベックで開催された第3回米州首脳会合で、FTAA創設に向けた具体的日程が承認された中で、チャベス大統領が始めて言及した構想であるが、同年12月にベネズエラのマルガリータ島で開催された第3回カリブ諸国連合 (Asociation of Caribbean States : ACS) では、ALBAに関する具体的な議論を開始するよう参加国に呼びかけた。

ALBAの公式ウェブ・サイト³⁵⁾によれば、「ALBAは異なる統合の提案である。FTAAが多国籍企業の利益に対応し、財・サービスの貿易、投資の全面的な開放を追及しているのに対して、ALBAは貧困、社会的疎外との闘争を強調し、ラテンアメリカの国民の利益を表明するものである。ALBAは、西半球諸国間の不均衡を補完することを可能にし、国家間の協力による利益を生み出すものである」との説明がなされているように、ALBAはFTAAが提唱する自由貿易構想と違い、経済分野の補完協力という性格を有している。

また、同サイトでは、「ALBAは、貧困問題を根絶し、社会的不平等を是正し、国民生活の質の向上を保証する地域の内発的開発に応じた、統合に関する合意の再考に係るコンセンサスを確立するための提案である。ALBAは、政治、経済、社会分野における新しいリーダー・シップが米州地域から台頭する中で表明された意識の覚醒を伴っている。我々は今まで以上にラテンアメリカとカリブを団結する必要がある。また、ポリーバル及びベネズエラの提案としてのALBAは、米州地域全体

34) スペイン語には「統合」の意味はないが、同構想の意味を踏まえ、日本語では「米州ポリーバル代替統合構想」とする。

35) 文献FのALBAの概要に関する項目 (“?Qué es ALBA?”)。右サイトでは、ALBAを “Alternativa Bolivariana para America Latina y El Caribe” の略としている。

で増加しているFTAAに対する反対運動という闘争も加わっている。ALBAは、(米
国主導ではない) もう一つのアメリカの建設が可能であることを表明するために、
ベネズエラの急進勢力の歴史的な決定を示すものである」と締め括っている。

更に、「Construyendo El ALBA : Nuestro Norte es el Sur」³⁶⁾ では、ALBAの具
体的な路線について、(a) ネオリベリズムに基づく統合が貿易及び投資の自由
化を優先するのに対して、ALBAは貧困と社会的排除との闘争に主眼を置く、(b)
ALBAは人権、労働の権利、女性の権利及び環境保護、物理的な統合を重要視する、
(c) ALBAは人権、労働の権利、女性の権利及び環境保護、物理的統合を重要視する、
(d) ALBAは完全な統合を妨げる問題(貧困問題、国家間の深刻な不平等と不均衡、
不平等な貿易条件、支払い不能な債務の比重、社会的・政治的な支援を蝕むIMF
及び世界銀行の構造調整、世界貿易機関(World Trade Organization : WTO) の厳
格な規定の強制等) に取り組む必要がある、(e) 規制撤廃、民営化、行政能力の解
体という酷いプロセスを導いた「国家の改革」に立ち向かう、(f) 高い成長率と集
団的な幸福に向けて前進を保証するために、自由貿易を賞賛することを疑問視する
必要がある、(g) 国家間の不平等を減少させることを目的とする国家の介入がな
ければ、不平等な関係にある国家間で自由競争は機能せず、弱者を犠牲にして強者
に利益をもたらすのみである、(h) ラテンアメリカの統合を深化させるためには、
主権国家が定義する経済アジェンダが要求される、等の点を指摘している。

ベネズエラ政府は、地域のエネルギー協力協定や国際放送局TELESURをALBA
の枠組みの中で推進しているが、今後どのような形式をとるのかについては明確で
はない部分も多い。直接に関係するケースとしては、チャベス大統領が2004年12
月13・14日にキューバを訪問し、カストロ国家評議会議長と署名した「米州ポリ
バル代替統合構想適用のための協定」が存在するだけである。内容は投資、国営銀
行支店の開設、国産品の輸入に対する関税・非関税障壁の撤廃、石油等の分野に亘
るものであり、ALBAを適用し、過去の協力協定の内容を発展させるものであった。

36) 文献H、47頁。

おわりに

1. ポリーバル革命には、独自の思想がある訳でも、理論的に首尾一貫した実体がある訳でもない。それ故、その内容や展望に関し不明確な部分も多かったが、年数と経験を重ねることで、チャベス自身の考えもより具体的になり、成功や失敗が新たな前進を可能にしているような印象を受ける。ただし、第2節で概観したように、同革命を支える思想的な要素は存在する。それがシモン・ポリーバル、シモン・ロドリゲス及びエセキエル・サモラという19世紀のラテンアメリカに生きた英雄の思想であり、チャベス大統領はこれらの思想を樹木の根に例え、ポリーバル革命を「3つの根から成る樹木」と称している。これらの思想を総合すれば、ポリーバル革命は、ラテンアメリカが主導する地域統合、同地域に根付いた独自の制度の確立、社会正義及び政治・社会・経済の平等、並びに貧困撲滅を目指す社会改革の必要性を説く理念とすることができ、チャベス大統領は、第四共和国³⁷⁾時代に確立された既存のシステムの打破を試みつつ、右理念を追求しているのだろう。

しかしながら、ポリーバル革命は果たして革命と言えるのかという問いについては、チャベス大統領の単なる政治スタイルであり、革命ではなく一種の改革に過ぎないという見方がある一方で、社会学者のハーネッカーは、政治権力を一社会組織から別の社会組織に移行し、移行後はあらゆる社会的側面の根本的な変革の実現を試みるプロセスとして革命を捉え、代替的な社会の中心的役割を担う主体を創造することが右プロセスの重要な点であると理解するならば、ポリーバル革命は革命プロセスにあると指摘している。また、ポリーバル革命は、権力を奪取して、国家機構を破壊し、急進的な経済措置を適用するという伝統的な革命とは性質を異にし、民主的な枠組みの中で実現されている革命プロセスであり、特有な革命 (Revolución sui generis) であると定義付けている³⁸⁾。

37) 注釈16) 参照

38) 文献E、4項及び85項。

2. このボリーバル革命を謳うチャベス大統領は、国内では就任当初と比べその支持率が下がってはいるものの、貧困層の国民を中心に依然高い支持率を維持している。これは「ミッション」と称される社会政策の効果もあろうが、同大統領が、自分達の立場に立った味方或いは代弁者であると認識されていること、希望を与え得る存在となっていることも大きい。更に、チャベス大統領は演説の際に、自身を「インディオ」、「モレーノ」、時には「ネグロ」³⁹⁾と称することがあるが、こうした発言も国民の立場に立った、或いはオリガルキーの多くを占める白人と区別するという観点からの発言であろう。

また、対外的には、2005年8月15日、チャベス大統領は、国会主催で開催された「モンテ・サクロの誓い」200周年記念行事において、米国の帝国主義の脅威と闘い続ける意志を表明するだけでなく、「我々の任務はこの世界を救うことであり、その規模はシモン・ボリーバルが担った任務より遙かに大きいものである」との演説を行ったが、同大統領にとって、ボリーバルが果たせなかった地域統合への夢は、地域統合という枠組みを越え、今や世界的な視野を踏まえたものとなっている。そして実際に、ボリーバル革命を輸出しているとの批判がなされている程、ラテンアメリカ地域にも一定の影響力を及ぼし始めている。

3. こうした中で、チャベス大統領は2005年に入り、21世紀型社会主義という概念を提唱するようになっていく。2月25日に当地で開催された第4回社会負債サミットでは、個人の見解とした上で、「政権発足後6年目を迎えた現在、我々の政治プロジェクトは『社会主義』であると定義付けることを提案する」と述べ、社会主義のイデオロギーを「世界中で育まれた尊厳」と評価した。また、ベネズエラが模索している社会主義は、過去の社会主義の何れにも当てはまらず、ベネズエラの現実

39) モレーノ (Moreno) は黒人との混血を指すが、黒人の意としても使われる。ネグロ (Negro) は黒人の意。チャベス氏自身の肌は褐色。ベネズエラでは混血を中心とするベネズエラ人をクリオーリョ (Criollo。本来は植民地であったラテンアメリカ生まれのスペイン人を指す) と称することが多い。

に即した新しい社会主義を創設する必要があり、方法については今後検証する必要性があると主張した。チャベス大統領が社会主義こそが真の民主主義を実現できる手段であると明確に主張したのは、これが初めてである。

とは言え、ポリーバル革命同様、この21世紀型社会主義についても、長期的な視点に立った具体的な経済計画がある訳でも、独自の確立した理論が存在する訳ではないので、分かりにくい部分も多々存在する。経済活動においては、貧困削減をもたらす公平な富の分配を目標とする、生産活動における労働者参加型のシステムを模索し、協同組合 (Cooperativa) 支援や共同管理体制 (Cogestión) の導入を推進しているものの、過去の社会主義と如何に違うかという点について説明されておらず、ネオリベラリズム、FTAA及びグローバリゼーションに対する批判を展開し、現在の批判の対象は主に資本主義システム自体に移っていると言っても、これまでのところ、資本主義経済の要素を完全に否定してはいない⁴⁰⁾。

また、21世紀型社会主義は、本稿で見てきたポリーバル革命と矛盾するものではなく、むしろ右に基づく理念であり、今後、21世紀型社会主義とポリーバル革命を時に応じて使い分けながら、国際的にはALBA等独自の地域統合プロジェクトを推進していくのではないか。ラテンアメリカ地域における左派政権はキューバだけではなく、チリのラゴス政権、ブラジルのルーラ政権、アルゼンチンのキルチネル政権、パラグアイのドゥアルテ政権、ウルグアイのバスケス政権、と広がっており、こうした政権との関係強化を進めている。また、チャベス大統領はラテンアメリカのみならず、国際的にも左派系の非政府組織や市民団体の支持を得ており、そういう意味でも地域の指導者としての地位を確立しつつある。

4. チャベス政権は現在、安定化に向かい、ポリーバル革命の下で実施されている政策は一定の成果を挙げているように見える。一方で、ポリーバル革命を推進して

40) 21世紀型社会主義に関する記述は、ベネズエラでの報道振り及びチャベス大統領の発言を中心に取り纏めたもの。

いる同政権のガバナビリティー、効率性、実行性、持続性を疑問視する声や、5つの国家権力だけでなく、国軍、PDVSA、マスコミを抑える手法が強権的、専制的として批判する声もあり、こうした批判を行う反政府派は、チャベス政権が実行していることはベネズエラの民主的な政治制度の弊害となっていると主張する。ただ、如何なる経緯を辿っているにせよ、民主的な枠組みの中で行われている限り、それを非民主的であると断言するのは難しいのではないだろうか。

ポリーバル革命の実績については、第4節で見たように、ここ数年は、時勢を踏まえてその都度政策を変える、或いは時勢に合わせた形式を適用しているため、現時点で評価を下せるという段階にはなく、依然プロセス上にあると言った方が適当であろう。なお、現状下のポリーバル革命は、チャベス政権の経済政策の実現を可能にしている豊富な天然資源、高値が続く石油輸出による収入、貧困層を中心とする政治的な支持基盤が維持される限りにおいて継続され得るという条件付のものであるということもできる。従って、こうした条件が取り払われた時に、チャベス大統領がどれだけの説得力をもって国際的にALBAを推奨できるのか、或いは、ベネズエラ国民がチャベス大統領を支持し続けるのかとの問いは、ポリーバル革命の真価を問う意味において無駄ではなからう。

(筆者は前在ベネズエラ大使館専門調査員)

参照文献

- A : Agustin Blanco Muños, *HABLA EL COMANDANTE : HUGO CHAVEZ FRIAS*, Cátedra “Pío Tamayo”, Caracas,1998.
- B : Alberto Garrido, *Testimonios de la Revolución Bolivariana*, Producciones Karol, Caracas,2002.
- C : Cristina Marcano, and Alberto Barrera Tyszka. *HUGO CHÁVEZ SIN UNIFORME: Una historia personal*, Editorial Melvin, Caracas,2005.
- D : *LA CONSTITUCIÓN (Segunda versión:Gaceta Oficial 5.454 del 24-Mar-2000*, Ediciones Juan Garay, Caracas,2001.
- E : Marta Harneker, “Venezuela:Una revolución sui géneris”, *Z Magazine* ([http://www mag.org/lac/ harnecker_lac-ven.htm](http://www.mag.org/lac/harnecker_lac-ven.htm);Internet), January 2003.
- F : *PORTAL ALBA*, <http://www.alternativabolivariana.org>;Internet.
- G : *Radio Nacional Venezuela*, www.rnv.gov.ve/noticias;Internet.
- H : Rafael Correa Flores, *Construyendo el ALBA: “Nuestro Norte es el Sur*, Parlamento Latinoamericano, Caracas,2005.
- I : 大貫良夫他編『ラテンアメリカを知る辞典』(新訂増補)、平凡社、1999年。
- J : 在ベネズエラ日本大使館編『ベネズエラ概況』、2005年4月。
- K : 神代修著『シモン・ボリーバル：ラテンアメリカの独立の父』、行路社、2001年。